

レフカダ島にて

巖谷 國士

ギリシアの西部、アドリア海上に点々とつらなるイオニア諸島のうちのひとつ、レフカダ島の主都レフカダ（レフカス）市のレフカス・ホテルに予約を入れておいたのは、そのものずばりの名前がわかりやすかったからである。日本においては地図も手に入らないような小都市なので、ロケーションがいいかどうか気がかりだったが、プレヴェサ南郊のアクティオ（例の海戦で有名なアクティウム）空港から西南へ二十五キロほど、相乗りタクシーで塩湖や岩山や糸杉の林のあいだを突っ走り、広い干潟と短い橋をひとつわたって入った島の東北端の港町の、まさに表玄関のような場所にあるホテルだったのは幸運である。B級らしいがかなり大きな近代建築で、戸口の上の丸いガラス面にペガサスの絵が描かれている。入るとロビーは薄汚い。帳場にいる背の高い女主人はなぜか機嫌がよくないようで、無表

情、無言のまま部屋の鍵をほつりなげてよこした。

だがこちらには聞きたいことがある。その不機嫌な女主人と傍らに立つ小太りの娘に、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の話をもちかけた。当地で生まれた詩人・作家・翻訳家・ジャーナリストで、ラフカディオ（レフカディオス）という名はレフカダにちなんだものだ。幼いころにギリシア人の母とともに父の故国アイルランドへ移り、長じてはアメリカ中部からマルティニック島へ、さらにはるかな日本へと放浪の旅をつづけた人物である。この港の近くには彼の生家があり、詩人公園というところに記念像が立っているらしい。どこなのか教えてもらえないものだろうか。

二人ともなにも知らないようだった。レフカディオス・ヘルンの名は耳にしているが、生家も記念像も見ることがないとい



ラフカディオ・ハーン(レフカディオス・ヘルン)のブロンズ像、左の顔

う。そもそも詩人公園なるものがレフカダの町にあるというのも疑わしい。なにか情報を得たいのなら市役所へ行くのがいいだろう、と。

やむをえず部屋へあがっていった。三階の海側だが、シャワーのみ、戸棚もベッドもちゃん木目入りの合板製で、壁はしみだらけ、床はほこりだらけ。だがカーテンをあけはなつとバルコニーがあり、そこからの眺めは予想以上のものだった。

東に海峡と干潟が見わたされ、かなたにはギリシア本土の山がちなシルエットがのぞまれる。島といっても古代には本土の一部だったらしい。ストラボンによれば、前六五〇年ごろにコリントス人がここへやってきて植民市レウカスを築き、防御の

ために運河を掘って本土から切りはなしたのだという。のちに独立市になって二百年間ほど栄えた。マケドニア、ローマの支配をへて、後五、六世紀にはヴァンダル族やフン族の侵入と二度の大地震によって衰退。一〇〇〇年ごろにピサが進出し、ついでトルコ、フランク族もやってきたが、やがてヴェネツィアの支配下に入る。トルコの攻撃に耐えつつヴェネツィアの統治はつづき、十八世紀にはフランス領、ついでロシア領、イギリス領。一八三〇年にギリシア王国が独立してからもイギリス軍はのこり、二度の大戦をへて一九七四年にギリシア共和国が成立するまで、数奇な運命をけみしている。面積は淡路島ほど、現在の人口は二万人強。最近では観光が主産業で、イギリス人の客が多いらしく、そういえばさっきのタクシーに相乗りしていたのも、マンチエスターからのホモ二人組だった。

ところで港の手前には、公園のようなしつらえの広場が見おろされる。柳やプラタナスが茂り花壇や池もあり、だがまわりは駐車場になっていて中途半端なスクエアで、南端のイオニオンスター・ホテルに近い芝地のなかに、小さな半身像の立っているのが見える。どきりとした。ひよっとするとあれがラフカディオ・ハーンかもしれない。さっきのホテルの母娘の反応からして、まさかと思われはしたけれども、さっそく外へ出てその広場あるいは公園を歩いてみることにきめた。

シケリア又広場というらしい。だが噂にきく詩人公園という呼称もあてはまりそつに思えるのは、詩人たちの記念像が二、

三、目立つところに配置されているからである。西北のレフカス・ホテル側に、古代デルフィの祭礼を復活させたアンイエロス・シケリアノス（一八八四—一九五一）のブロンズ像、中央近くには、愛国政治家でもあったアリストテリス・ヴァラオリティス（一八二四—七九）の石像。まさにレフカダに生まれた二大詩人の像なので、とすればいちばん奥のいちばん小さな像も、レフカダ出身のもうひとりの詩人であることが当然に思えてくる。

近づいてみるとやはりそうだった。台座にはギリシア語で「レフカディウ・ヘルン（括弧内にローマ字でコイスミ・ヤクモ、一八五〇—一九〇四）にささぐ」とあり、その上に背広・ネクタイ姿のこわい顔をした中老紳士のブロンズ像がのっている。あまり似ていない。というよりも、まるつきり別人のように見える。記憶のなかの肖像写真とくらべると、顔の輪郭や額の形はまあいいとしても、あのとがった鼻や、ぎよろついた右目の印象がない。いやそもそも、両目がそろって前方をむき、何かを見おろしているという演出がおかしい。周知のように、ヘルンは隻眼だった。十六歳で左目を失ってしまったため、その痕跡を見られないように気をくばり、いつもかならず右顔だけを写真にとらせていた。のこる右目も強度の近視だったので、写真にうつるその眼球は多少とも出っぱり、たいていはぎよろりと虚空をにらんでいたのである。

顔半分の写真しかのこっていない人物の頭部を彫刻するのは

むずかしかっただろう。それにしても、つぶれていたはずの左目を、想像でもいいからなんらかの方法で表現してくればよかったのに、とこの小さなトルソを見て思ったものである。

そこから南へと歩いた。九月のはじめの午後五時をまわっているが、まだ陽射しはまばゆい。ときおりすれちがう観光客ははたしてイギリス人ばかりで、かつての支配者にはなじみの出先なのだろうと思う。だが家並はちがう。ギリシアふう、というよりもヴェネツィア統治時代の雰囲気なのこっていて、地中海上の多くの島々のような真っ白い壁ではなく、黄色、ピンク、緑色などに塗られた建物が多い。丈が低くてせいぜい三階だてまで。しかも一階は石造、二階以上が木造という独特の建てかたになっているのは、たぶん地震にそなえてのことだろう。二階のバルコニーには洗濯物、一階の戸口の前には木やプラスチックの椅子。シエスタ（午睡）を終えて出てきた人々がのんびりと夕刻をすごす路地の光景。まだ暑いがひんやりとした夕風の予感はある。空き地に咲くブーゲンビリアやノウゼンカヅラの鮮やかな赤紫色、オレンジ色が目にこころよい。

そんな路々をうろつろするうちに、海岸通りの角に立つ薔薇色の家の壁のプレートを見てはっとした。レフカディウ・ヘルン（ヤクモ・コイスミ）通りとある。その路地を西へ進み、端まで到達すると中老の男がひとり立っていた。小柄で髪が黒く、



レフカディオス・ヘルンの生家

目がぎよるぎよるしていてヘルンに似ている。挨拶をするとにっこり笑い、近くの家の壁にある小さなプレートを指さした。そこにはなんと日本語で「遍るんの道ノ八雲会」云々と書かれている。男はついてくるようにといって先に立ち、いま来た通りの六番地までもどった。剥げかかったピンクの壁に白い窓枠。そのなかの緑色の鎧戸も、すぐわきの茶色の戸口もしまっている。それがレフカディオス・ヘルンの生家だった。

二階は木造らしい白い壁面から、鉄製のバルコニーが張りだしており、鳥籠だのバケツだの植木鉢だのが置かれている。レフカダのごくふつ々の民家の建物だろう。もとはあった三階の

部分が地震でこわれたのでとりさつたと物の本にあるが、いまはなにごともなかったかのように二階家として別の家族が住んでいる。

右どりの家がおもしろかった。へんてこな白い幾何学模様のある戸口があげはなたれていて、なかは台所兼食堂なのだが、その奥で夫婦喧嘩がはじまったところである。禿頭の小柄な中老の夫が、黒髪、小太り、エプロン姿の神経質そうな妻にどなられ、逃げまわっている。杓子片手につめよる妻のまくしたているギリシア語は抑揚が強く、思わず聞きいつてしまうほどの迫力がある。

私はこの妻の様子を覗き見していて、なんとなくヘルンの母親（一八二三 八二）のことを思いつかべていた。

ギリシア南部の愛の島、例のアフロディテ誕生の伝説のあるキスィラ（シテール）の名家に生まれたローザ・アントニア・カシマチは、だが正規の教育をうけず、字も習わず、ギリシア正教の神秘に憑かれて育ち、夢みがちで情緒不安定な少女時代を送っていたといわれる。一八四八年、キスィラにやってきたイギリス軍の外科医将校、アイルランド出身のチャールズ・ブッシュ・ハーン（一八一九 六六）に見そめられた。婚約中に妊娠し、島の人々からはうとまれたが、翌年にレフカダ島の軍事基地サンタ・マウラ要塞に転属となったチャールズに同行し、第一子のジョージ・ロバートを産んでから結婚。この子は一八五〇年八月に亡くなったので、その二か月前に生まれたパ

トリック・ラフカディオ(パトリキオス・レフカディオス)が長男となった。

夫チャールズがドミニカ、グレナダで軍務についているあいだに、ローザはラフカディオをつれて夫の実家のあるダブリンへ移住させられたが、英国国教徒の由緒正しい旧家に、英語の話せないギリシア正教徒の異邦人女性が受け入れられることはなく、ときには差別をつけ、一八五三年に夫が帰国したときには神経症気味だったという。翌年には故郷のキスィラ島にもどり、三男ジェイコブ・ダニエルを産む。四歳のラフカディオは大叔母にあずけられて養育されることになった。三年後に父はローザとの結婚の無効を申し立てて認められ(字の書けないローザの署名がなかったためだという)、初恋の美女アリシアと再婚。母ローザのほうもキスィラ島でイタリア系の男と再婚し、息子に対する親権を放棄させられた。いちど彼女はアイルランドを再訪しているが、息子の居所を教えるはもらえず、傷心のまま帰国したらしい。そのうちに神経の病が進行し、コルフ島の精神病院に収容され、そこで十年をすごしてから亡くなった。ラフカディオは母のこの悲しい末路を、生涯、知ることはなかったといわれている。

それにしても、この母への思いが、のちのラフカディオにつきまとうようになったのは当然だろう。四歳で生きわかれたのだから、おそらく記憶もさだかではなかった。レフカダの町と島についても同様で、二歳までしかいなかったのだから、どん

な土地であるのか知るよしもなかった。ギリシアそのものにしてても同様だろう。それなのにこの遠い生地を思い、失われた母を慕い、旅から旅へ、そしてついには一八九〇年四月に、三十九歳で日本に到達し、自分とおなじくらいの背丈の不思議な人間たちの行き来する異国になじんだとき、想像のなかのギリシアに似たものをそこに見いだし、生地を、そして母を思いおこしていたことは理解できる。この旅人はいつも、自分の失われた揺籃をめざして放浪していたのである。

ダブリンで育ったラフカディオは、十一歳でフランスのノルマンディー地方イヴトールの教会学校に入れられ、フランス語を身につけた。二年後には北イングランドのダーラムにあるカトリック系の全寮制カレッジに進学、十六歳のとき、ジャイアント・ストライドの遊戯中にロープの結び目が左目にあたって失明。十七歳で中退し、しばらくパリやロンドンにいたらしいが、一八六九年、移民船でアメリカにわたっている。中東部のシンシナティで、ジャーナリスト・翻訳家としての才能を認められ、一八七五年には、白人農場主と黒人奴隷とのあいだに生まれた混血女性のアリシア・フォーリーと結婚、白人と黒人の結婚を禁止する州法にふれたため、さまざまな困難に出会う。二年後に南部のニューオーリーンスに移り、クレオール文化の調査・研究をすすめる。小説を書き、フランス文学の翻訳をつづけ、ま

た中国怪談集なども出すことになる。一八八七年、ニューヨーク經由でカリブ海上のマルティニック島へ。未知の故郷を思いおこさせるこの南の島で、『仏領西インド諸島の二年間』を書いてからふたたびニューヨークへもどり、日本行き計画をたてる。カナダのモントリオールからバンクーヴァーへ出て、一八九〇年三月にアビシニア号に乗船。四月四日、二週間の船旅を終えて横浜に着いたのだった。

こうした遍歴にはひとつの興味ぶかい傾向が見られる。レフカダもアイルランドも、マルティニックも日本も島であり、十九世紀の西欧から見ればいわゆる辺境、いわゆる周縁の地だということだ。シンシナティやニューオーリンズもアメリカ東部から見ればそうだろう。このような地理的選択はハーンの周縁文化への傾倒とも関連している。好んで吸収しようとしていたギリシア文化、ケルト文化、クレオール文化、ニッポン文化はどれも、白人、キリスト教、近代合理主義に中心を置く十九世紀西欧文化とは異質のものだった。ギリシア人とケルト人（ジプシーの血がまじっていたという説もある）の混血だった彼は、そればかりか背が低く（一五五センチもなかった）、片目であり、また両親と生きわかれた孤児のような境遇もあって、たえず社会的マイノリティーを自覚しつつ擁護してもいた。ついに生地には帰らなかつたけれども、そのためにかえって多様性と周縁性の発見をつづけ、こんにちに受けつがれるべき先見の明を発揮したのである。

他方、左目を失明してから、見えるほうの右目も強度の近視になったという事実もまた重要だろう。ニューヨークで友人の眼科医のおこなった検眼によれば、およそ二十五ジオプリーの近視だったというから驚く。それでも厚すぎるレンズの眼鏡をいやがって、ふだんは裸眼のままくらしていたという。私自身もそれに近い強度近視なので想像がつくのだが、おそらく三十センチ先の人の顔もよく見えなかつたろう。近視眼特有の勘で判別はできていたはずだが、そのむこうの世界となると、ごくごく漠然としか見えていなかつたろう。にもかかわらず、ヘルンが作品のなかで家や町や自然のありさまを表現し、風景描写さえおこなっているのはどうだろうか。ひとつには、見えないからこそ注意力と想像力が強化されていた。さらに視覚以外の五感がはたらいていた。彼が鳥や虫の鳴き声を好み、日本人の虫を飼う習慣が古代ギリシア人に似ているといったり、アイルランド育ちのわりには味にうるさく、『クレオール料理』のような本を書いたりしていること、また金髪と黒髪のちがいは匂いでわかると語ったりしていることは興味ぶかい。とくに場所の匂いへの敏感さが初期の新聞記事の特徴になっていたことは、すでに指摘されているとおりである。

もうひとつは、写真への偏愛という一事だろう。見えない顔も光景も、写真を通してなら確認ができる。いや、写真にくつきりとうつつている像そのものが、強度近視の目には新鮮な驚きであり、つねにはない快樂でもある。ハーンは既成の写真を

見るのを好んでいただけでなく、自分で写真を撮ることでも好んでいた。一八八七年、マルティニック島を再訪する際に、高価なフランス製のカメラ「ディテクティヴ」を入手し、人や町や海や山の光景を撮影している。それにもとづいてスケッチをしたり、記事を書いたりもしている。この写真という媒介が強度の近視眼（そしてある種の視覚障害）の持ち主にとって悦びの源であることは、私自身、体験的によく理解できるところである。

さて、その「遍るんの道」を抜けて中心街のデルプフェルト通り、スピリドナス広場、イオア又通りやメガニシ通りをぶらつきながら、傾いた陽光のなか、私は驚きと悦びの瞬間に出会うたびにカメラのシャッターを切った。あちこちにあらわれるこの町の教会はおもしろい。本土のギリシア正教建築とちがって頂上にドームを設けず、木造の屋根にとどめているというのも、おそらく地震が多いからだろう。どれも背が低く、窓が少ない。イタリアの影響をうけているのか、扉口のまわりや上に浮彫があったり、円柱がはめこまれていたりする。ふだんは戸をとぎしていて内部は見られないが、周辺には町の人々がつどい、子どもたちが走りまわっている。一見してギリシアよりはアドリア海のむこうのロマネスク教会のような雰囲気をもったものさえある。

なによりも不思議なのは鐘楼の様式かもしれない。これも地震にそなえてのことだろうが、教会に隣接して鉄のヤグラが組

まれ、梯子で上へのぼるようになっていた。ヤグラの上部には時計があり、三角屋根のつぺんに十字架が立っている。白塗りだが消防署の火の見のような感じがあつておもしろおかしい。ときには庭園を設けたなかにこれがそびえているから奇妙である。

ヴェリオティ通りを歩いているうちにやっと見つかった。クリーム色の壁にオレンジ色の屋根の、小さなアイオス・パレスカヴィ教会。これこそはレフカディオスが洗礼をうけたとされる教会で、裏庭にまわるとやはり鉄骨の鐘楼が立っている。たまたま側面の戸があいていたので忍びこむと、青空の色の天井からはシャンデリアがさがり、小窓のステンドグラスごしに陽が射しこんでいて、思ったよりも明るい堂内だった。東側の壁いちめんひろがるイコノスタシスもきらびやかだ。片づけをする若い男がいたので話しかけてみたが、彼はやはりレフカディオス・ヘルンのことを知らないのだった。

夕食を海岸通りのレストラン「アルキョーナ」（鳥の名である）でとることにした。魚が見たいというと、奥から「本日の鮮魚」を大皿にのせてもってきてくれた。オマールやヒラメは高価なのでやめて、イカ、タコ、小エビ、小イワシを注文する。炭火で焼いてオリヴ油とレモン汁をかけて食べる単純な料理なので、あまり御馳走にめぐまれることのないこんにちのギリ



アイオス・パレスカヴィ教会とその鐘楼

シアではあっても、魚さえ新鮮ならばと期待できる。いや、期待した以上に旨かった。アドリア海の、というよりも地中海そのものの味がする。イカやタコは歯ぎれがよく柔かく、香草をまぶしたエビやイワシは芳ばしくてじつにいい。だがそれ以上によかったのはサラダかもしれない。つけあわせとしてとったのだが巨大な白いボール入りで出てきた。大量のトマト、キュウリ、黄ピーマン、

タマネギがオリヴ油の池の上に浮いている。塩をふってばりばりと食べつづける。旨い。これだけで二〇ユーロほど。

以上のものを食べつくすころ、外のテラス席で一杯やっていた中老の男が話しかけてきた。小柄で白髪で色黒で、やはりヘルンに似ている。だがヘルンのことは名前しか知らないタクシー運転手、スタ

ヴロス氏である。あすは島を突つきつて南端のドウカト岬へ行くのだという。はじめは渋っている。あそこへ行くのはたいへんだ、道路が最悪だ。レフカダのタクシーはどれもけつしてあそこへは行かないだろう、という。それは残念、とあきらめかけていたら、話のむきがふいにかわった。行こう、行こう、五時間の貸しきりにしよう、といいはじめた。松脂入りの白ワイン、レツイーナの酔いが急にまわったのかもしれない。

翌朝、約束の十時より一時間も早くスタヴロス氏はホテル前に来てしまい、食堂で朝食をとっている私のところまで挨拶にあらわれた。大いに乗り気らしい。車の前へ行くと、助手席には若いかわいい女性がすわっている。英語ができるのでつれてきた、という。聞いてみると、スタヴロスの娘なのだ。通称はフエー。フランス語の「妖精」であることに心をつこかされる。もっとも彼女自身はそんな語義を知らなかった。

まず西へむかう。山をこえる。淡路島ほどの大きさでも山が多く、直線道などほとんどない。西海岸のアイオス・ニキタスに立ち寄ったが、わりと俗っぽい保養地にすぎなかった。海はしかし美しい。ふかいコバルト色が白いごつごつした岩山、白い砂にうつる。レフカダの古名レウカスは、もともと「白い」の意から来ているのだ。

カラミチ、ホルタタ、コミリヨなど、山道ぞいの集落をかすめて南下する。ときおりカフェニオンのテラスがあつて、そこにつどう暇な男たちがこちらに挨拶をおくってくる。アタニカ



ドゥカト岬とイタカ島をのぞむ

ら先は舗装がなくなる。なるほど、真正正銘の悪路である。くねくねと曲る細いでこぼこ道を、バウンドしながらのぼったりおりたりする。ガードレールのない絶壁の上のカーブはこわい。おんぼろメルセデスの車内はまるで地震のようである。

娘のフェーも、じつはこの先の岬へ行くのははじめてなのだという。そのせいか浮き浮きしている。スナック菓子をばりば

りと食べながら、ピクニックの気分らしい。要するにこの父娘の目的は、ついに行楽をすることなのかもしれない。こちらもその気なので話は合う。バウンドしながらとぎれとぎれに語るのは、アドリア海の魚、島の特産物オリーヴやブドウのことである。しばらく行くとつぜん視野がひらけ、起伏の多い丘陵地のかなたに海がのぞま

れた。南へのびる地峡の先端に灯台が立っている。そのむこうの薄青い海のなかに、ぼんやりうかがふ島影がある。あれがイタカだ、とスタヴロス氏は叫んだ。フェーも歓声をあげる。イタカとは、いうまでもなくオデュッセウスの生地であり、トロイア戦争後の二十年にわたる放浪の船旅の末にたどりついた故郷の島、イターケーにほかならない。

もっとも現在のイタカが『オデュッセイア』のあの島なのかどうか、異説もある。例のアマチュア考古学者シュリーマンは独特の直感から、じつはレフカダこそがほんとうのイタカだと推察し、島をおとずれて調査してもいる。その没後は遺志をうけついで弟子のデルプフェルト（一八五三—一九四〇）がレフカダ東部ニドリ湾のあたりを掘りつけ、ついに確証を得られぬままに逝ったという話もある。デルプフェルトの墓はその湾の入口アイア・キリアキ半島にのこる。じつは昨日ぶらついたレフカダ市のメインストリートの名は、この人物の名前をとったものである。

私は当然のようにラファディオ・ハーンのことを思う。もうひとりのオデュッセウスと呼べなくもないこの放浪の作家は、もちろんデルプフェルトの説を知っていたはずがなかった。けれどもレフカダのすぐ南にイタカという島のあることはわかっていたにちがいない。もしかすると母ローザにつれられて、当時なら馬車に乗せられてこのあたりまで来て、イタカの島影をのぞんだことさえあったかもしれない。

そもそもオデュッセウス型、といえるような人間のタイプがあるように思う。そう多くはいないだろうが、近代にも何人かの作家がそんなタイプに属していて、たとえばハーンとおなじダブリンに育った現代の作家、『ユリシーズ』の著者ジェイムズ・ジョイス自身(そういえば、この人も極端に目がわるかった)だってそのひとりだろう。ポセイドンの怒りにふれたわけではないにしても、何かの運命を背負いこんで旅をせざるをえなくなる放浪気質の人間。オデュッセウスとは、「憎しみの犠牲者」の意だという。とすればラフカディオ・ハーンの場合、生いたちからしてもその資格がありそうだ。ただし彼は故郷の記憶をもたなかった。むしろだからこそはげしい憧れをいだき、そこに似た島をもとめて西へ、南へと旅をつづけたのだろう。隻眼の巨人キュクロプスや妖魔キルケとたたかう長い旅のはてに日本にたどりつき、失われた楽園の幻をいざうることができたのは、ともすると、故郷を見たおぼえがないという事情にかかわることであつたのかもしれない。

日本が彼にとってほんとうの意味で故郷の代替物であつたのかどうかはわからない。だが強度の近視眼という一種の特権のおかげでヘルンは日本をぼんやりと美化して見ることができた。近視眼のほうが美しい景色を見られるという彼の説には負け惜しみもふくまれるが、たしかに山なら山を眺めて、複雑な細部

や醜い陰の部分にとられずに、漠とした輪郭と色彩だけを、たなびく想像の霞のなかに見ていられる者はある意味でしあわせだろう。日本の松江、熊本、それに焼津。東京のような首都は別として、これらの地方都市には当時まだ周縁、辺境としてのよさがあつた。ぼんやりした視像によつて、写真や望遠鏡を用いて、また聴覚や嗅覚や味覚や触覚を通じて、百年前にヘルンの感じとつた日本はやはりいくぶんか、記憶のなかにない、だが想像のなかに育つていた故郷、もうひとつのイターケーとしてのレフカダに似ていたのだろう。

私たちは現在のイタ力を遠望する丘からさらに南下して、いよいよ細くなる瓦礫の道をがりがり走り、ついに先端の岬の灯台の下までやってきた。行きどまる手前の狭い空き地で車をむりやり方向転換させてから降り、乱雑の石を積んだ急坂の道をのぼつて灯台の前に立つ。まわりにはなにもない。いや、絶壁のむこうの茫漠たる虚空がある。前六世紀に古代ギリシア随一の女性詩人サッフォーがファオンとの恋にやぶれて身投げをしたと伝えられる白い断崖。その上へ近づくことはさすがにおそろしくてできないが、フェーは妖精さながらに平然と縁まで行き、七二メートル下の海をのぞきこんでいる。そのありさまを見て父親のスタヴロスは心配するでもなく、おーおーと声をあげて満足の意を表明している。

私はもういちど南のあなたのイタ力を眺めやる。海峡は青くおだやかで波もほとんどない。一隻の船がゆつくりと東へ進ん

でいる。白く小さく見えるその観光船がやがてマグリットふうの青い帆船にかわり、徐々にクローズアップされてくるのを感じた。レフカディオス・ヘルンの旅のことだけでなく、テオ・アンゲロプロスの映画『ユリシーズの瞳』（原題を直訳すれば、オデュッセウスの凝視）の冒頭場面が連想されてくる。現代のもうひとりのオデュッセウスである映画作家Aが、長い旅を終

えて故郷にもどり、だがたたび運命を背負って旅だつところである。彼は「旅……」と英語でつぶやく。その言葉が「Travel」ではなく、Journeyであったことをふいに思いおこした。私はそのときそのはるかな青い船を、想像のズームつきの自分の目で写真にとることにしたのだった。